

## 七王妃物語

佐藤 良士

古代への遙かな憧憬とエキゾチシズムの国、ペルシャ。今回はそのササン朝ペルシャの王子の物語です。12世紀のイスラムの詩人が書いた物語で、あまりなじみは無いんですが、読んでみてください。



ササン朝ペルシャの王子バハラーム・ゲールが、遠く離れたイエメンで育てられたのは、彼が生まれた朝、占星術師の天秤にそう現れたからである。ペルシャに臣従していたイエメン王はスハイル星が輝く地に宮殿を建て、王子はここで天文学やその他のことを学んだ。

ある日のこと、王子が荒野で野生ロバを狩っていると、1頭の牝の野生ロバが彼の前に現れた。ロバは石榴色のベールを被ったような美しい毛並みを持っていた。そして王子の前で飛び跳ねると、突然物凄いスピードで駆け出した。

彼らが荒野を遠く離れた洞窟に達すると、その入り口に一匹の竜が眠っていた。竜は王子が近づくと目を覚まして、口から火を吐き獲物を飲み込もうと身構えた。「これは、いったい何たる獲物か！」

王子は叫ぶと、ポプラづくりの矢をつがえ竜の二つの目を射抜いた。そしてすばやく近寄ると、巨木の柱のように倒れた怪獣の首を刎ね、竜の咽喉もとから尾の先まで切り開くと、中から野生ロバの子が現れた。王子は野生ロバが子の仇打ちをするために、自分の前に現れたことに気がついた。

それから、王子が野生ロバに導かれ洞窟の奥に入ると、そこには金銀宝玉のつまった数え切れないほどの壺が置かれていた。王子は三百頭のラクダに財宝を積んで宮殿に帰り、十頭分の宝をイエメン王に、同じく十頭分の宝をその王子に、またその他の珍品を宮殿の役人に惜しみなく与えた。

イエメン王は、竜を倒す王子の絵を絵師に描かせ、スハイル星の輝く宮殿に飾らせた。こうしてペルシャの王子の勇気、冒険譚は人々の間に広まった。

またある日のこと、王子は百の美術館を集めたほど美しい作品に満たされた、秘密の部屋を見つけた。中でも王子の目を引いたのは、七人の美女の肖像画だった。それはインド、中国、ホラズム、スラブ、マグリブ、ビザンチン、そしてササン朝ペルシャの王女や娘たちの肖像画で、そのかたわらには一人の王子の姿が描かれ、その上には次の文章が記されていた。

「七つの星が定めるところによれば、この世界の王は七つの国を従え、七つの国から七人の美女を得るであろう」

バハラームはその予言に驚嘆し、それが自分の肖像画であることに気が付いた。

その頃ペルシャでは父王が死に、傍系の篡奪者が王位についた。これを聞いた正統な王位継承者のバハラーム王子は、イエメン王の援助を受けて兵を上げペルシャに戻ると、篡奪者にこう伝えた。

「吾はジャムシード（ペルシャ神話の偉大な王）の直系であり、王権の全てを継承する。しかるに今篡奪者がその王の座に座っている。汝は王冠を外し飢えた獅子の間に置かねばならない。その王冠を取るものこそペルシャの王である」

次の日、王子は荒野から烈風のように広場の獅子に立ち向かった。どうして百頭の獅子を倒した者が、二頭の獅子を恐れようか。彼は牙をむく獅子を一喝すると、獅子の間に置かれた王冠を手にとった。獅子は頭上の王冠を奪おうと彼に襲い掛かったが、王子は足元に獅子を投げ倒して王冠を守った。

王子の比類なき力を見た篡奪者は王座を降り、人々はバハラームこそ正統なペルシャの王と呼んだ。バハラーム王子はこうして王となった。

ペルシャ王は神の恵みに背かず、神に感謝をし国を治めた。国中に富は広がり、世は王の命令に服した。ある年、穀物が実を結ばず広い世界が困窮した時、王は穀物庫の扉を開いて、四年の間収穫はなかったが国民は死をまぬがれた。

またある時、ペルシャ王の名声を快く思わなかった中国の皇帝が、三十万の恐るべき軍勢を率いて世界の王の土地を奪おうと東よりオクサス川に迫った。この時王はわずか三百騎で立ち向かった。しかしその兵たちは一人で百の獅子を倒す武勇の者たちだった。王は夜討ちの奇襲を行い、暁が東天に太陽の剣を抜き放ち、大空に曙光が現れたとき、地上では数知れぬ中国の兵士の屍があった。

こうしてバハラームが世界の王となった時、スハイル星の輝く宮殿にあった七枚の絵のことがよみがえってきた。王は予言通り、世界の七つの地域から七人の美女を迎えることにした。

まずはペルシャ、カヤーニー家の流れを汲む王女。その父はすでにないが数千もの贈り物を贈り宝石によってまことの真珠、すなわち王女を得た。

ついで中国、戦火を交えたハーカーン皇帝に使者を遣わし、宝物と冠を贈り、そのうえ七年間の朝貢を免除して王女を求めた。

次にマグリブ王には金貨と王座と王冠を与え、インドにも王女を求め、ホラズム、スラブ、ビザンチンには書面によって水滴のように輝く美麗の王女を得た。

こうして七人の美女を得た王は、毎夜宴を催して青春を謳歌した。

ある日、座にいた一人の男が進み出て言った。彼は測量、設計の名高い技師で幾何学、占星術にも明るい建築家で画家でもあった。

「もしお許しくださいませ、私は王に比類なき栄光をさしあげましょう。私は天を測り、星を測り、天空の働きを推測出来ます。絵画と建築術も技がございます。私は七人のお妃方のために七重の天空のような七つの丸屋根御殿を建てましょう。

丸屋根の色はそれぞれに異なり、それはちょうど七人のお妃がどなたもそれぞれの故国の美と装いを身につけておいでなのと同じこと。そして七という数字は、

七天を廻る星の数と一致して、また私どもの一週間の曜日も同様になっております。王は毎日、一つひとつの丸屋根御殿で、御殿と同じ色の衣服を着たお妃とお楽しみ下さい。そうして王はお命がある限り人生を楽しむことになるのです」

こうして七つの丸屋根御殿が作られた。占星術師はそれぞれの屋根の色を天空の七つの惑星の性質に応じて決定した。すなわち、麿香(じゃこう)のような土星は黒、白檀色は木星、赤は火星、黄金色は太陽、金色はもちろん金星、幸運のトルコ石は水星、緑色は月』というように。

こうして王は、七日の間に異なる色の衣服を着て七つの御殿に出向くと、七色の王妃に迎えられた。妃たちはまた王の心を慰めるために、愛の炎をかきたてるような七つの物語を用意して王を歓待した。例えば、次に紹介する話は四日目の火曜日、赤い屋根の御殿の妃が赤い衣に身をくるんで王に聞かせた物語である。

ロシアの王様には大事に育てた一人の王女がおりました。その頬はバラ色、艶やかな糸杉の姿形で、甘い唇は砂糖より甘く、また王女はあらゆる学問を修め、技芸の書を紐解き、その秘奥、魔法に精通していたのです。

王女に結婚を申し込もうと彼女の元を訪れる男たちは天空に散りばめられた星の数ほど居ましたが、彼女の館は高い山の山頂にあって、麓の道は魔法で封印されており、たとえ魔法を破ったとしても最後は王女のかける謎賭けを解けなければ、あわれな求婚者は命を絶たれてしまうのです。

ここに一人の気高い若者が王女に結婚を申し込むために、彼女の元を訪れました。若者は霊力あるものの助けを借りて、赤い衣を身に纏っておりました。

若者は衣の力で山道の魔物を打ち破ると、王女の館の秘密の城門にやってきました。そこで若者は城壁に近づくと鞭で太鼓を激しく打ち、音の反響で壁の回りに、微かに音の漏れるところを見つけました。それこそは、城壁に抜き描かれた門扉、こうして秘密の城門に入り、若者は王女の館に入ることが出来たのです。

若者の一部始終を城館の窓から見ていた王女は、美しい両耳の耳たぶの真珠を外すと、侍女に若者を案内するよう命じました。

「これをお客様にお届けして、ご返事をもらってきなさい」

若者は渡された二つの真珠のうちの一つを王女に返すと、残りの一つは大切に宝玉の入れ物にしまいました。王女は戻された真珠を石で砕いて、その白い粉に砂糖を混ぜ合わせ、再び若者に届けました。

若者は一杯の乳を侍女に求めると、それを器の白い粉にかけてかき混ぜ

「これを王女にお渡し下さい。そして私と王女の婚礼の支度をして下さい」

驚いた侍女が、王女に若者の言葉を伝えると、王女は侍女に言いました。

「最初にあのお方に渡した2つの真珠の意味は、『あなたの命はあと2日ですよ』。するとあの方は1つの真珠を私に返し、『例え1日でも同じことです』。

私とその真珠をすり潰して砂糖を混ぜてお渡ししたのは、『欲望で穢れたお方

の目では、例え呪文や錬金術を用いたとしても、美しい真珠だけを取り出すことは出来ないでしょう』、するとあのお方は真珠と砂糖の粉に乳をかけて返された。御覧なさい、砂糖だけが乳の中に溶けて、残っているのは元の真珠　　」

それから、美しく微笑むと侍女にこう言いました。

「あのお方に伝えて下さい。あなたは魔を祓い、秘密の扉を開いて美しい宝を手に入れました。私は喜んであなたの妻になりましょう」

このようにして二人は幸福に結ばれ、若者は赤によって幸運を得たので、「赤衣の王」と呼ばれたのです。

バハラーム王が七つの天空より高い御殿で饗宴を開き、美女達の物語にふけっている間に王国は星の輝きを失った。

ある年、東方より一人の使者が中国反乱の報せをもたらした。

「東方の皇帝は王との誓いをやぶり、またもやオクサス川まで打寄せてきました」

しかし、強敵を打ち払うには軍団と宝庫の財宝が欠かせなかったが、王が気付いた時には頼りになる勇者は五人と居ず、宮殿の宝庫は空になっていた。

バハラーム王の耳にある言葉が聞こえた。それは神の声であった。

「この世の美女の館を去り、不滅のところにおもむけ」

王は、もはや七王後の作り話に耳を貸さなくなった。天空がいつかはこの世の絨毯を巻きあげて、すべての壮麗に造り上げられた御殿も塵芥に還ると悟った王は、七つの円屋根御殿を出て、神の神殿に赴いた。そして七つの御殿を七人の司祭に与え、そこに火を燃やして拝火教のし火殿としたのである。

ペルシャの栄光の翼が再び蘇るのを見て、中国の皇帝はオクサス川から東に退き、バハラーム王は再び世界の王となった。

ニザーミーはイスラムのセルジューク朝の時代にペルシャ語で文学を残した詩人で、1141年生まれと言いますから12世紀の人です。紹介した「七王妃物語」は、七人の妃がバハラーム王に語る7つの枠物語で構成されている物語で、それぞれの話は荒唐無稽で「千一夜物語」と同じように古い民間説話を元に行っているといわれています。

アケメネス朝やササン朝で光彩を放つペルシャという国は、7世紀以降に起こったイスラム以後、この好戦的で排他的な政治や文化の影響が現在まで続いているんですが、セルジューク朝はペルシャ古典文学の黄金期といわれ、ウマル・ハイヤームとかニザーミーといった詩人が、耽美的な詩やロマンスを書いた時代です。

ニザーミーは、今回書いた「七王妃物語」よりも「ホスローとシーリーン」や「ライラとマジヌーン」といった、遠い世界の恋物語が名作とされていて、一度は読んで見たいんですが、今、それを読むには、あまりにも平凡で平和で、怠惰な日々を重ねすぎたようです。僕も、そしてあなたも　　。